

昭和二十五年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十五年四月二十八日印刷
昭和二十五年八月一日發行

第十六卷 第八號

浄土

八月號

秋を待ちつゝ 吉田絃二郎

たと申す念佛 藤井實應

阿寒まで 佐藤賢順

元祖と肖像畫 小島章見

善

「諸の惡をなすなかれ、衆の善を行へ、自から心を淨くせよ、これ諸佛の教なり」と云ふからには吾々は倫理的な「善」の問題を眞剣に考へ確實に各自の心に止めねばならない。

佛教では善惡の判斷を二つの觀點からする。それは社會一般の判斷と佛教獨特の判斷とである。前者は廣い意味の地理・歴史の關係に於て相異するから永遠不變性はない。後者は解脱菩提に隨順するのを善、これに逆流するのを惡とするから、解脱菩提の永遠であるのと共に不變であると云ひ得る。その主張の如何にかゝはらず、社會善と解脱善とが佛教に必ずや不離の關係にあるのは、佛教信者の心の有機性による。そしてその説明はその人の知識によるので種々の形を取り得るわけである。解脱善はさらにまた社會善を改良し、これを抱擁する。そしてその主觀は社會善と解脱善を理論的に結合しやうとして、こゝに佛教倫理の體系が作られるのである。然し同じ意味で更に社會惡が解脱善に止揚される。これが天台の性惡であり、眞言の即身成佛と同じ眞理であるが、これは水素爆彈と同じで一步あやまれば全宇宙を破滅に導くのである。これを佛教倫理の體系の中に入れるには理論的にどう處理したらよいか、佛教倫理の問題の中心はこれ等の問題に盡きるのである。(松濤誠廉)

目次

たゞ申す念佛……………藤井實應(20)

母の惱み……………藤代綏子(8)

夏・盆……………鳥居良禪(3)

そのものズバリ(時評)……………竹中信常(7)

子供・佛・極樂……………須藤隆仙(14)

秋を待ちつゝ……………吉田絃二郎(1)

阿寒まで……………佐藤賢順(10)

逆境の恩寵……………宮本文哲(16)

妻のたしなみ……………早見君子(18)

會友俳句……………(13)

元祖と肖像畫……………小島章見(4)

芝園だより



秋を待ちつゝ

吉田 絃二郎

越後の糸魚川の相馬御風さんが歿くなられた。このころの若い人には親しみが薄いかも知れないが、明治末期から大正にかけての日本文壇、思想界に在つて、絶えず第一線の先頭に奮闘した人であり、最も花やかな存在であつた。

その相馬さんが「還元録」一巻を残して、郷里糸魚川へ歸つてしまつたのは大正何年であつたらうか。

相馬さんの突然なこの舉は當時の文壇の人たちを驚かしたものであつた。なかには「御風は何うせまた東京にもどつて来るよ」と語つてゐる者もあつた。

しかし相馬さんはつひに東京へは歸らなかつた。東京に歸らなかつたばかりでなく、東京へ立寄ることさへしなかつた。糸魚川に退いたのはまだ三十代の若さであつたが、六十幾歳で亡くなるまで、三十年の間に、相馬さんはたゞ二度だけ東京に立ち寄つただけであつた。その一度は島村抱月さんの告別式が青山で行はれた時、式場

で弔辭を讀むためであり、その一つは逍遙先生が歿くなられた時、熱海の双柿舎に行くために東京を通らなければならなかつたのであつた。相馬さんは東京へ足を向けるのもいやだつた」と或る人が語つてゐた。

良寛さまが、昔、江戸の龜田鵬齋を訪ねるために、はるばると越後からいて歩來て鵬齋の玄關に立つた。ところが玄關の書生は良寛さまの態を見て、乞食坊主と思ひ込み「先生はお留守」と斷はつてしまつた。しばらく経つて、鵬齋はそのことを知り「それは越後の良寛和尚にちがひない」と、驚いて、人を走らして武藏野の原中で良寛さまに追ひ付いた。「是非御立ちかへり」をと願つたが、良寛さまは江戸の片隅も覗かないで越後へかへつてしまつた。

相馬さんが東京に足向けもしなかつた姿なり、心持ちなりには、良寛さまの話を思ひ出させるものがあるように感じられる。

虚偽、虚榮、他人を押しつけても榮達をはかるあさましい都會人の生活を思ふ時、良寛さまは江戸の町を歩くだけでも呼吸が苦しくなつたのであらう。相馬さんにもそれがあつた。

相馬さんの家は代々糸魚川の大きな佛師であつたとか佛具屋であつたとか聞いてゐる。北陸地方は名だたる佛敎國であるに加へて、代々佛さまを扱ふ家の子として育てられて來た相馬さんに、一面脱俗的な潔癖さがあつたのはきはめて自然なことである。

相馬さんの家は三度火災に見舞はれてゐることなども良寛さまに傾倒するに至らしめた幾分かの原因であつたかも知れない。

相馬さんが糸魚川に歸郷して、良寛さまをわたくしたちに知らせてくれたことは、洵にありがたいことであつた。

このころ越後で良寛さまの遺物展示會が催され、それを觀に行つて東京にもどつて來た友人から次ぎのやうな話を聞いた。

「今度の良寛さまの展示會は主として宮川(?)といふまだ三十そこそこの青年によつて催されたものでした。宮川氏は糸魚川に相馬さんを訪ねて、良寛さまの遺墨を貸

していただき度いと申込んだのです。相馬さんは快く承諾して、二三時間も快談して、倉に入り、愛藏の良寛さまの遺墨を宮川氏に渡したさうです。宮川氏はよろこんで、その足で直ぐ汽車に乗り高田の堀口大學さんを訪れ今、相馬さんに逢つて來たことを話してゐる矢先きに、高田新聞社の記者がやつて來て、相馬さんが死んだと知らせてくれたさうです。宮川氏は二時間前に別れたばかりの相馬さんが亡くなつたと聴き、驚いてふたゝび糸魚川の相馬さんを問ふと相馬さんはすでに不歸の客となつてゐたといふのです。御令息たちの言葉によると、相馬さんは宮川氏を見送つた足で、裏の畑に出たのです。たまたまそこに咲いてゐた夏草の花を見て、(寂しい花だな!)と言つてゐたさうですが、その場で目まひがして、そのまゝずつと眠つてしまはれたさうです」

これが友人の談であつた。まことに夢のまた夢である。

わたくしは糸魚川に相馬さんを二度訪ねたことがあり、その畑にも相馬さんといつしよに立つて海をながめたことがあつた。畑から直ぐに日本海になつてゐるので、風の強い日は畑まで潮吹がかゝつて來る。

わたくしは一度はアカシヤの花の咲いてゐたところ妻と

二人で糸魚川に相馬さんをお訪ねしたが、その時は奥さんも元氣でおゐでた。二度目は時雨のところであつた。奥さんも歿くなられ、わたくしの妻も、相馬さんも今は世になき人となつてしまつた。

大井川の岸の島田の町の友人からたよりがあつた。友人の家は島田の町の舊家である。もう三十年も前のことである。初めて島田の友人の家を訪れた時、庭の咲きみだれた八重櫻の下に「五月雨の雲ふき落せ大井川」という芭蕉の句碑を見出してゆかしく思つたことであつた。

大井川の土堤改修のをり、心なくも積石に使はれようとしてゐたのを、友人の先考が酒三舛を與へて家に運ばせたものであるといふことであつた。それ以來島田の友人を思ふごとに、五月雨の句碑のことが頭に泛かんで來るのであつた。

かれは戦時中にも、他の同業者たちからは馬鹿者扱ひにされて、眞つ正直な商ひをつづけて來た。

世につれて闇商ひに懷を肥やし、上手な世渡りをした人たちはこのごろの金詰まりにも四輪のトラックを買ひ三輪オートバイを購めて、商品の配達サービスをやリ、得意先を擧げて行く。かれも絶絶對命である。何としても得意先に品物を届けるだけのサービスはしなければならぬ。かれは三輪車を買ふために六七萬の金を才覺しな

ければならぬ。かれはついに、この三十年が間に蒐集した書物を全部手放すより他に方法はなかつた。いよいよかれの愛藏の本が運び出された時は、ほろりとしたと、友人は書いてゐた。人心のすさび果てた今の世にも神佛を恐れ、まことの心に生きる人があることを考へるだけでもありがたい。

たゞ、しかし一臺の三輪車にも氣の毒な、時代の歎きが潜んでゐるものである。

夏

鳥居良禪

山腹の寺の庭は

ただ萋萋と夏草が靡いていた

黄昏はやく

谷を廻つて寒蟬がなき

西の廻廊は

淡い石竹の影とともに暮れて行つた

日

盂蘭盆がすぎると

庭の百日紅が美しい珊瑚色の花を開く

夏の雨が

しずかに小さな家と庭をうるほし

その老木の梢をこえて

しばらく鮮かな虹が渡つた

法然上人と肖像画

小 島 章 見

法然上人の眞影を畫くことを所望した人に、上は後白河法皇をはじめ、弟子に至つては、法性寺空阿彌陀佛、勝法房、熊谷入道、津戸三郎等がありますが、後白河法皇が藤原隆信をして、法然上人の御影を畫かせしめた以外は、法然上人は御自身の肖像畫を畫かれることを余り好まれず、寧ろお困りになつた様であります。その譯は法然上人が肖像畫といふものに対して、はつきりとした御意見をもつておられたからであると思ひます。このことは、安樂房蓮西の父の七七日の逆修を修する際に、前六會の導師として法然上人を迎へ逆修說法を仰いだ時の、第五七日の阿彌陀佛、雙卷經、五祖影の段の逆修說法隨聞記（漢語燈錄）に、

凡そ祖師の眞影を圖するは、即ち二意あり。一つには恩德に報いんがため、二つには賢を見て齊しく思ふためなり。

と定義を下していraftしやいます。私はこれは眞影に對する法然上人の通釋であると考へます。然るに御自分の肖像畫となると、上人は本當に御慎重になられたようであります。

あるとき津戸三郎が法然上人に、お袈裟を所望したときに上人は、わざと當時かけ古したのを授けられましたし、更に念珠の所望に至つては、上人の御返事に『先の世のふかき契とあはれにおぼえ候』とて、數珠ひとつをあたへられました。然るにいよいよ法然上人の肖像畫を所望するに至つては、上人はこれをお許しになりませんでした。九卷傳津戸入道往生事に

又上人の御影を所望しけるに付いて、或る時の御返事に云く、影の事は、熊谷入道の書いて候しかども、無下に此の姿たがひて候ひしかば、すてゝくだりて候也。されば此度もえがきて下し候はぬには、唯、口惜しく候。其かはりには善導和尚の御影をおがませおはしますべく候云云。

といふ御返事に依つても如何に御慎重であられたかが窮はれます。

津戸三郎はこれに對し

『我が影のかはりに善導和尚の御影をおがめと仰せられた事を、ほとんど過分の御詞かなと思ひけれども。人に語らざりけるに、

(中略)上人はたゞ人にては御坐りけりと、いよいよ信心ふかくして往生の後にはかならずおもひ出づべきよしをのせられ、また極樂にまいりあへとのせられたる、御自筆の御文共をば錦の袋に入れて身をはなたずして、念佛しけるが、誠に時いたりけるにや、建保七年正月に、右大臣家薨逝の時、御免を蒙て出家の本意を遂にければ、上人よりしるし給ひける法名を付けて尊願とぞ申ける。上人御往生の後には日に隨て極樂の戀しく、年を遂げて穢土のいはしく覺へける儘に、常に此の文を取出して拜見しては、とく迎へさせ給へと申けれども、むなしく年月を送りける。』

と述懐しております。右の九卷傳の文によつても、法然上人の肖像畫に對するお考へが何邊に存したかを窺ふことができると同時に、津戸三郎が法然上人の肖像をいたゞけなかつたことによつて、却つて逆縁とも、善因ともなつて、發心を深め、願求淨土の喜びを得たといふ話は聞くだにすがすがしいことであります。

このように法然上人は御自身の肖像畫には殊の外にお氣をくばつたようであります。例へば法然上人行狀繪圖四十八卷傳(勅修御傳翼讚)第八に、かの上人の弟子勝法房が法然上人の眞影を畫きたてまつり、其銘を所望した際、上人はその肖像畫をみて、鏡二面を左右の手にもち水鏡をまへにをかれて、頂の前後を見合せられ、たがふところは、胡粉をぬりておなをしになつたといふ小傳説的な文を讀んでも、法然上人のお心の内が更に察せられます。勿論、法然上人の自畫肖像説などはあるはずはなく、それは大略、右の勝法房の傳説が誇張され強引附會されたのであらうと考へます。

また法然上人は建久九年四月八日の没後遺誡の文に、没後には自分のために追福を修したり、一所に聚居して諍論をいたしたり、忿怒を起したり、かつは圖佛、寫經、檀施等の善を修することなく、一向に念佛の行を修するよう。そしてむしろ自餘の修善を雜へてはならぬように遺誡をなされ、また勅修御傳翼賛にも、

『佛を圖し、經を寫す等の善、浴室檀施等の行、一向に之を修すべからず。若し報恩の志あるの人は唯一向に念佛の行を修すべし。平生の時、既に自行化他に就いては唯念佛の行に局れり。没後の後、報恩追修のためには、寧ろ自餘の修善を雜んや』(原文漢文)と遺誡を残しておられます。この文意は先きに述べた法然上人の肖像に對する解釋が通釋であつたのに對し、別釋とも云ふべきものであります。即ち法然上人の心底には別釋として影像をば報恩のために追修することも實は自餘の修善であると解く、唯一向に念佛の行を修すべきだと定義せられて、肖像畫を畫くといふことが雜善根に屬するものであると遺誡しております。

末代の我々に對し、この深き御注意があつたにもかゝらず、法然上人をおしたい申す弟子達の、庶民的な心情より發した願望は一枚の墨摺繪の肖像畫となつて、現に正和四年十月の刻銘を有し、黒谷上人御影の版木(知恩院所載)となつて残つております。このことは法然上人の別釋からは、宗祖にそむくことにもなりますが、通釋の義からは一向にさしつかへないと思ひます。たゞそれでは法然上人の御意に隨ふように肖像畫を拜するにはどうあるべきかといふことを心得ておく必要があると思ひます。

現今、佛教美術として、佛、菩薩像の彫刻、繪畫や、經卷や、寺塔の建立寺をとりあつかふ造形（遺形）佛教藝術に對し、法然上人はどうゆうお考へをお待ちになつておられたかを考えてみますと法然上人は往生業のためには難善根に屬する佛教美術など究極において不必要なものであると説かれてあります。だが、法然上人は一方に於いてはまたかゝる難善根をすゝむることは一つの功德となるから一向にさしつかへなく、淨土教に於ける往生業のためにはむしろ、來迎引接の形象を造り、深く來迎引接の誓願を仰ぐべきであるとも申されています。

こゝに於いて『繪像法然』という言葉が思ひだされるのですが、この意味は繪に畫き、木石に彫刻した姿か（住持三寶）、そのまゝ佛であり、實相である（別體三寶）という意味が繪像法然の内意であります。つまり實相の上に立つて、うけとるこちら側のさとりかただとも云へませう。これについて法然上人などは、むしろ往生淨土の信仰から、繪畫の彫像や、彫刻の佛像などは住持三寶に屬するも、むりにむかへるといふことは、三種三寶の次第がみだれる原因ともなり、殊に住持三寶と、別相三寶との分別がなくなつてしまい、本尊が娑婆にとゞまつて、行者が西方に去るといふようなことになり、存外の事となつてしまふのであると申されております。この御言葉は『繪像法然』の解釋にも深く味ふべきお言葉であると思ひま

す。たゞし法然上人は、『淨土の佛のゆかしさに、そのかたちをつくりて、眞佛の思ひをなすは功德をうることである』とも申し附け加へておられます。これも興味深いお言葉だと思ひます。

そこで『繪像法然』の立場に正しくあるようにはかの御流罪の時に門弟等々に示された法然上人の御詞が大切なものとなつてくるのでもう一度それを省みますと。十六門記に、

『夫現世すら猶もて疎からず。同名號を唱へ同一光明の中にあいて、同聖衆の護念を蒙る。同法尤も親し。愚に疎しと思食べからず。南無阿彌陀佛と唱へ給へば、住所は隔つといへども、源空に親しとす。源空も南無阿彌陀佛と唱たてまつるが故なり』

とあります。このお言葉もよくよく味つてみるべきで、將に法然上人の肖像畫に對しても、同一光明の中にこれを拜す心のありかたでなければなりません。こうゆう意義であの法然上人のお眼を拜すると慈眼は光明をほんとうに投げて下さる様に思はれます。聊か淨土教藝術の本質論に迄もふれてきた様な感じがいたしますので、今回は之で筆をおくことにしたいと思います。



「たましいつて本當にあるんですか」

「靈魂のことですか。それならありますよ」

「さうでしょうね。私もそう思うんですけど。」

他の一人がいう。

「じゃ、地獄とか極樂なんてものは」

「無論ありますよ。」

「矢張りね。してみると此娑婆世界で一生懸

決出来ない。「ある。」さうでなければ「ない。」

この二つのいづれか一つしか答える道はない。それを「あるでもなく」「ないでもない」のへうたんなますが、今日佛教の信仰をぬえのようなわけのわからないものにしてしまつたのだ。

信仰は理窟ではない。理窟などは後からつけたもので、まづ信仰があるべきである。林

そのもののズバリ

竹 中 信 常

命善業を積んで、お念佛を唱えなければなりませんね」

二十のとびらの解答者の言葉に「そのものズバリ」というのがある。間接でない。問題そのものを直接に、端的に掴みとることである。いいまわしとか形容とかは必要でない。

問題の核心を刺しとおしてしまふのである。地獄極樂という問題も、形容詞や理窟では解

じれば、理窟の有無に拘らずあるのである。

信仰が先でなければならぬ。今の職業宗教家は逆である。理窟がまづ出て来る。而も信仰がない。いわんや「そのものズバリ」などは思いもよらぬことである。

右か左か。これもそのいづれかでなければならぬ。戦時中は皇道佛教を、戦後は佛教民主主義を。これでは萬一ソ聯進駐の曉は佛教共產主義をいうことになる。佛教の正體が分らなくなるのは當然である。

カトリックでは理窟のいかんを問わず、眞向から産兒制限には大反對である。その是非はとに角として、その態度には尊敬すべきものがある。少くともそのいづれをともしめかねている佛教徒、いや態度をきめようとすらせぬ佛教家からいうならば。

大衆の要望しているのは、吾々の考へではない。吾々の結論なのである。そのものズバリ、夕立の後に大空を横切つてすすやかにわたる虹の壯麗さであつて、虹が現われる理窟ではないのである。

某が金閣寺を焼いた。その犯行の動機を自ら告白して「美に對する憎惡」だとか「大衆への反感」といつた理窟をつけていふ。然し、いくら理窟をいつた處で、日本が世界に誇り得る數少い文化財の一つを焼いたというその惡行は決して正當化されはしない。少し極端だが信仰もさうである。理窟を百萬並べても、ない地獄はないのである。またあると信



母の悩み

藤代 綏子

ボストン生れの娘は、三歳になつて幼稚園へ入つたとき「神さま、オレンヂ・ジュースをありがとうございます——クラッカーをありがとうございます」と言つて頂くことを覺えた。小學四年まで、そのおやつの感謝はつゞけられた。芝の聖心女學院に通つて、毎日の山のような宿題のかたわらにも、福音書を暗記していた娘はたのしそつた。

ニグロの歌に「神のみぞ知る」というのがある。私がその歌をうたう時、イエスといふところで、頭を下げないと言つてむづかつた。白紙のような九歳の娘の頭の中には、神といふ幻がとびこんで行つたといふ感じさえあつた。そのカトリック修業の二年をすませて、娘はまたボストンに歸つて行つた。

ボストンの彼女の室の戸棚の隅には、いつのまにか、十字架、ローソク、數枚の聖畫、などで美しく飾られた祭壇がつくられていた。ある日、食卓で十字を切つてゐるのを見た父親は「ヤソ教はやめなさい」と叱つた。それからというものは、食堂に来る前に部屋で祈つてくるらしい。またある日、私と娘と外出した留守に、片附けることの好きな父親は娘の部屋も整理したのだらう。二人が歸つて來たときには、娘の室の祭壇はどこかに片附けられてしまつてゐた。歎き悲しむ娘の姿はいぢらしいものだつた。

十四歳になつたとき、また日本に歸つてきて、前と同じ聖心に入學した。卒業まぎわに校長から無理にカトリックになれとすゝめられたが、成長していた娘は、自分の宗教は自分で探すのだとことわつて、聖心を去つた。他の學校を卒業して、またボストンの大學に

如是語觀

○ 現代人には、無常といふことがわかつてゐない。常なるものを見失つたからである。

○ 思想が混亂して、誰も彼もが迷つてゐる。そういう時には、とかく人間らしからぬ行爲が、合理的な實踐力に見えたり、かんたんすぎる觀念が、信念を語るように思われたりするものである。

○ 平和といふやうな空漠たる觀念のために働くのではなく、働くことが平和なのであり、働く工夫からこそ生きた平和の思想が生れるのであると確信した人、そういう風に働いてみて、自分の精通している道こそ、最も困難を道だと悟つた人——そういう人々は隠れてはゐるが、到るところにゐるに違ひない。

入るため海を渡つた。いまはハーバード大學姉妹學校に學んで、多くの、恩師友人の感化でスク／＼とのびて、私のとき得ない道を歩きはじめている。

「多くの書物を學び、學位をとり、名士とか金持ちとかになると言うことは必ずしも大切なことではない。お母様がいままで育て、下さつた私というものを、こんどは私自身でクリスチャンとして育成してゆきたい。私はキリストの歩んだ生涯こそ、私が歩みたいと願ふ理想の世界だということを見出しました。山上の垂訓をよんで、私はじつとしてはいられない。何かをしなればと、あせりもがく。私は、私自身というものを見出したい。お母様の娘としてではなく、たゞ一個の素子(娘の名)というものはつきりと知りたい。自分には何か欠けている。どうかして、しつかりと自分をつかみたいのです。」

眞實を求めるために苦しんでいる娘の手紙を讀むと、私は、「佛教とはこうなんだよ、マ、はこう思ふのよ」と、どんなにかしても書き送つてやりたい。

だが、私の佛教への關心は、お法事るときに限られている。何年忌とか、何十回忌とかひとりひとりの先祖の法事をいとなみ、お辭儀とお焼香だけは、型にはまつて上手になつてきたけれど、佛教への知識のからつぽなのを考えると、全く恥しい。娘の手紙がひんぼんになるにつれ、私の机には、佛教の本が重なつてはゆくが、そうしてつく／＼佛教を少しでも勉強もし、信仰としての佛教にはつきりふれてゆきたいとは思ひながらも、仲々本をひもとこうとしない。娘の手紙を讀んでいると、にじみ出てくる眞情に泣かされる時がある。人生の表面ばかりで生活している私には、人生の奥に存在しているものにふれ得ない私には、たしかに娘の手紙を、眞に譯することが出来ないのではないかと、この頃のようにひんぼんに来る宗教に關する手紙をよむと、そうふかく思ふ。

あゝ私の娘は、私とちがう道を歩きかけている。

(筆者は、もとハーバード大學助教授夫人)

色即是空と觀すれば大智を成じ
空即是色と觀すれば大悲を成ず

——世界事象は究極においてむなししい。これが眞の認識である。人はこのおそるべき認識に堪えて、それにきたえられよ。そしてこのむなしきものが、もつとも具體的に現前するところ——すなはち、今の中に集中することを知れば、このきたえられた人には、意義ある行爲への熱情が生れる。

○

われらと地獄または天國とのあひだには、この二つのものとの間なる、この世の事物のうちのもつとも脆い生命があるのみ。

○

疑ひながらためしに右に曲るのも、信じて斷乎として右へ曲るのも、その運命は同じことである。どつちにしたつて、引返すことは出来ない。試みたとたんに、あなたの運命がちやんときめられてしまふ。人生には試みなんて存在しない。やつてみるのは、やつたのと同じだ。

で ま 寒 阿

順 賢 藤 佐

八月十二日

北見峠を越えると、下り勾配にかゝつたお蔭で列車はどうやら快適の速力で走り出した。視界が開けて、右手はるか彼方に、大雪山諸連峰が峰また峰と、肩を組み合はせて居並び、するどい山容を露わし出した。

遠軽からは南に下る地形になる

し、夕陽が大雪山々系の彼方に沈む時刻になつたので、山容は影繪となつていよいよ鮮かに浮き出してきた。落葉松の林の續いた果ての、空が赤く夕陽に映えて輝くあたりには、綿雲の幾片が、これも赤く染められて、じつと動かずに浮いている。その下に、重疊と起伏する山々の鋭い稜線が空を突いているのである。自ずから果てしない遠いものに思いを馳せずにはいられない心持である。

眼を轉じて左の車窓から反対側の風光を愉しむと、これはまた坦

々とした平原が遙かに連らなつて、野面は緑に光る。網走の平野である。野末は遠く海に——オホーツク海に連つている。しかし海は見えない。平野の果てに海を隠した風景ほど、奥深いものはない。それほど無限を、永遠を想わせるものはない。その果てがまだ見たことのないオホーツク海だと聞けば、なお更のことである。

私もN氏も黙々として物思いに耽つていた。

美幌という淋しい町に一泊した。

八月十三日

バスは驛前から出ます、早くお乗りになつて席をお取りにならないと坐れません、なにしろ長い時間ですから、立つたまゝではとても……ということだつたので、九時の發車を一時間も前に出て、空バスに乗り込んだ。話の通り發車までには、はち切れるほどの満員になつて、腰かけたら腰かけたきり、足を曲げたら曲げたきり、腰を伸すことも膝を動かすこともできない混み方である。やがてバスは走り出す。すさまじい速力で美幌峠めざして疾走する。放牧の子馬が親馬の脚に絡まるようによちよちと従いてゆくのに追いついて危くその横腹へぶつかると、ヒヤリとする間に、すれすれに追い抜ける。

驛を出てから凡そ一時間半、小豆や馬鈴薯の畑地は盡きて、灌木地帯の丘陵を登つたが、やがて車は、ふんわりと雲の峰へでも上つたように、高い所へ出てとまつた。眺望が一時に開けた。名にし負う美幌峠である。海拔五二五米、阿寒国立公園の全貌を一目にする

ことができる展望臺である。暫く停車するから降りて見物なさい、
 というので皆どやどやと降りて、硬張つて動かなくなつた膝や腰の
 あたりを撫み撫み、道路の脇の一段高くなつた展望臺へ上つてゆ
 く。幸にも雲はたいして深いというのでもなく、その切れ目から青
 空の覗かれる所も多く、時折、サツと陽が射してくる。西北を俯瞰
 すれば、大波のようにゆつたりとうねる山又山の彼方に平野が開け
 陽に照らされて緑に光る。野毛牛、美幌の方角である。それから東
 へかけては網走の野が續き、その彼方はオホーツク海へ落ち込んで
 ゆく。もしよく晴れた朝ならば、遠く波頭を望むことができはしな
 いか、など、空想してみる。

西南は——これも山又山、嶺又嶺で、阿寒湖に至るまでには一千
 米以上の峻峰が幾つか突兀として山肌も荒々しく、肩を組み峻しき
 を競つてゐるが、遠くは雲に隠れて定かには見極められない。脚下
 に屈斜路湖が見下される。半月形に紺碧の水を湛えて、湖心に中島
 (トモシリ)を抱いている。周囲の原生林が黒ずんだ緑の塊りと
 なつて、たゞもくもくと盛り上つてゐる。まるで屈強の男の肩や腕
 の逞しい筋肉の塊のようである。

玩具の積み木を仕舞うように、女車掌が世話を焼いて、脚と脚と
 は元のように重ねさせて、少しの空き間なしにキチンとお客を詰め
 込んで、バスは腰を上げて、川湯までのあと三十キロを走り出し
 た。

川湯温泉から先はバスはない。で、乗用車を探してもらつて、そ

れで摩周岳へ廻つて、弟子屈——阿寒湖畔四十二キロを走破して、
 日の暮れぬうちに阿寒湖畔の宿へ着こうというのである。タクシー
 の來たのが三時半、ちよつと廻り道になつたが、摩周岳と摩周湖を
 見た。折よく雲がすつかり晴れて、山も湖もよく見えた。これはア
 イヌが神の居る山(カムイヌプリ)、神の居る湖(カムイトウ)と呼
 ぶ山と湖で、屏風の如く屹立する赤黒い絶壁が、そのまゝ湖へ落ち
 込んで、湖は緑青を溶かしたように、まつ青に淀んでゐる。その色
 の取り合せが、いかにも不氣味である。それにこの環境を包む静寂
 が一層凄みを加え、神祕など、という感じを通り越して、魔神の住み
 家という氣がする。

いよいよ弟子屈から阿寒への道へかゝる。これは一般に横断道路
 と呼ばれて、山裾を縫つて開拓されたえんえんたる道路である。左
 は山、右は熊笹の深い谷を隔て、千古斧を知らぬ原始林に對す
 る。車の進むにつれて展げられてくる景觀は雄大そのものである。
 停々として空を摩するエゾマツ、トドマツの林の深さは計り知れな
 い。針葉樹の大木の間にもう眞紅に紅葉している美しい葉がちらち
 らと見える。

「あれはイタヤモミジ、あの赤い實をつけているのがナナカマド
 向うのがサビタ……」

N氏は一々植物の名を教えてくれる。そそり立つエゾマツが幹や
 枝に、白い綾羅を纏うたように装うてゐるのが一層淋しく古びて見
 える。あの白のはサルヲガセという苔の一種で、俗に天狗のひげ
 といつてゐるのだとN氏が説明してくれた。私はN氏の博識に内心

舌を巻いていた。こうした眺めは、あとからあとから展開されてきて、行けども行けども盡きることはない。関東でもしこれに似た景觀を求めるならば、鹽原から川治へ行く裏日光の原生林がやゝこれに似ているが、勿論その雄大さは比較にならない。

運轉手が途中で、道路工事から歸る工夫を一人拾つて、運轉臺に乗せて走つてゐるうちに、工夫はふと運轉手に何やら囁いて、車を止めさせた。「この邊だ」と繰り返えしながら、車を降りて左側の熊笹の間を捜している。運轉手もそれについて何か捜しているようであつたが、やがて、大聲で私達を呼んで、手招いた。

「來てごらんさい、熊の足跡があるんですよ。」

何事が始まつたのかと不審に思つて、運轉手を見守つていた私達は、

「ほお……」と溜つていた呼吸を吐き出して、續いて車を降りて彼らの傍まで急いだ。前足は丸く太く、後足は細く長く、子供の足跡ほどの大きさである。熊笹が短かく疏らで、濕つた土の見える崖を、よじ登ろうとして、幾らか滑つてゐる。熊は右の谷から這い上つて道路を横切つて、左の崖を上つたものらしい。道路を修理する工夫が見つけたのだという。ついに物語が現實と一致した。幼い頃から聞かされた北海道の熊の話、いまその足跡を現實に見て、北海道紀行にはなくてはすまされぬ一コマが書き加えられたような氣がして、「ほお……」という感激とも嘆息ともつかない聲を、もう一度漏らした。

「下の湖に魚を獲りに行つたのですよ」と工夫は語つた。

暮色が山を包み、原始林を包み、湖面を包む頃、車は湖畔の宿へ着いた。

八月十四日

ほのぼのとあたりの白らみ渡る頃、私は獨り起き出して浴室へ下りた。山鳩がボ、ボ、ボー、ボー、ボ、ボと、まだ眠りから覺めやらぬ聲で鳴き出した。浴室は烏瓜のような電球がぼんやり灯つてゐるだけで、まだほの暗い。浴槽は幾つかあつて、熱い湯が端の方から順々に流れ込んで、好い加減の温るさになる仕組になつてゐる。湯は休みなしに湧き出で、低い浴槽の縁から溢れて、チヨロチヨロと流れ落ちてゐる。湯舟の縁を枕にして、脚を伸ばし目を閉じて流れ落ちる湯の音を聞いている。低聲に靜かに自然が語る長談義——單調だが多少のリズムもある。

次第に夜が明けて浴室のガラス戸の外が明るくなつてくる。ボ、ボ、ボー、ボーと、山鳩の聲が繁しくなる。夜が明けてくると、ガラス戸の外がすぐ湖面であることがわかつた。湖上は一面の霧である。その霧を通して、西でも東でも、北でも南でも、山鳩が一せいに鳴き交わしてゐる。

「どちらからおいでですか。」

と、私より先に湯にひたつてゐた人は、挨拶代りに、こう話しかけた。今までの道順とこれからの豫定を話すと、その人は私達と逆

のコースを選んだので、お互の過ぎてきた道中について一しきり話
ははずんだ。

今朝は六時のバスに乗る豫定である。大樂毛^{おたのしげ}まで六十二キロ半、
それから先は汽車である。はるばるとこの湖畔まできたけれど、ほ
んの一泊一浴しただけで、もう出発しなければならぬ。慌れてき
た雌阿寒岳の姿もまだ見ない。しかし明日の夕刻までには、どうし
ても小樽に入らなければならず、十六日からはまた小樽を中心とし
た地區での講演が始まる。だが何とか時間の都合をつけて、この湖
畔で一日を楽しむわけにはいかないであろうか。と、昨夜もN氏と
地圖を擴げ列車時間表と首つ引きで、祕策を練つたのであるが、ど
うしてもこのバスに乗るより外に手はないのである。美酒佳人を残
して立去る思いである。

六時のバスのお客は御飯は間に合いません、と前の晩から言い
渡されていた、パンとハムの食事もそこそこに、湖畔のバス發着所
へ急いだ。曉の霧はいつの間にか晴れて、紺碧の空が大手を擴げて
きた。四二〇米の高地の空は碧玉の如く青い。昨日は夕霧に迫られ
て遂に見えなかつた雌阿寒岳、雌阿寒岳、阿寒富士などの代赭色の
美しい姿が、紺碧の空にくつきりと頂界線を限っている。

バスは雄阿寒温泉に寄つて客を寄せ、阿寒川に沿つた街道を南へ
下る。初秋の空は晴れ渡つていよいよ高く、爽やかな風が渡つてい
る。未練がましく振り返つて、來し方を仰げば、桔梗色の空に雌阿
寒が突兀として聳え立つている。紫色に、錆色に、褐色に、赭色に
彩られた山容が、仰ぎ見るたびに心をそめる。その姿はバスが方向

を變えるにつれて、右に見え後に見えていたが、だんだんと遠く幽
かに大空の中へ退いてゆく。こうした大樂毛に着く三時間近くの間
振り返り振り返りして、雌阿寒の山姿を楽しむことができた。
やがて大樂毛の驛であつた。鐵路の南側の平地にはハマナゼシコ
やトリカブトが紅紫とりどりに咲き亂れ、はるかその先には大平洋
の波が寄せている。
(或る夏の日記から)

おせがき

竹原竹堂

汗つゝと背を落つ施餓鬼連座かな

隨喜僧、施餓鬼の燭を繼ぎまつる

施主呼んで施餓鬼塔婆に供物添へ

團扇

野内英光

ほたる追ふらし團扇が二つ旅の宿

一疋の蚊を追ひつめて子の寝顔

子供・佛・極樂

——ある夏の回想——

須藤隆仙

去年、夏期子供會を開いた時のこと。

小學校四年生の子供に「先生、お釋迦様とイエス様とどちらがえらいの」と、聞かれて私は思わずギクツとした。即座に答えなければと思ふと、尙更氣がイラ／＼して中々回答出来なかつた。少し考えてから「そうね……どちらも同じ位偉いよ。」と云つたのが、最も短い時間に、ありつただけの智慧をしぼつての答だつた。子供は何かしら、物足りない様な顔をしてゐたがそれ以上は聞かなかつた。

それから二、三日して今度は、別な子供に「先生、わたし教會（もちろんキリスト教）の日曜學校へ行つた時、何が一番たのしかつたと思ふ。」と聞かれた。つい先頃迄この子た

ちが教會に行つてゐた事は知つてゐたし、又

この様な難問題を持ちかけられることも予期してはゐたが、相手が純眞な子供だけに、その意外な質問には全く當惑してしまつた。「なんだろうね……。先生、教會の日曜學校へまだ一度も行つた事がないからわからないや。」と云ふと、子供は言いくさうに

あのネ、それはネ、イエス様のお話、その中でイエス様と魔法使いのお話なら何邊聞いても、あきなかつたワ。

と云つた。イエス様と魔法使のお話といふのを聞いた事もなく、讀んだ事もない私には、全然わからないが、とにかく相當子供の心をうまくつかんだ、印象深い物語らしかつた。

「誰がお話してくれる」と聞いたなら「小學校の△先生よ」と答えた。△先生とはまだうら若い女の先生で、カトリックの熱心な信者なのである。私は「なる程」と思つた。△先生のお話ならキツト子供等の胸にふかい印象をあたえるものがあつたに違いない。△先生の深い信仰を知る私には、信仰からにじみ出る感化力が、どんなに大きいものであるかが想像できたからである。この二つの問題には全く教えられるものがあつた。

「佛陀とキリストの優劣」——私の視界には唯一つ佛陀よりなかつた。それは眞に絶對であり、キリストと比較する餘裕もなく、兩者を同價值に見る事すらいやだつたのである。殊に子供達が以前、教會に行つてゐた事を考へると、イエスよりも佛陀の方が優れてゐると云いたかつたのが私の偽らぬその時の心であつた。

また「キリスト教の何が童心を動かしたか、と云ふ問題に對しても、私は教義や信仰ではなくて、全然正反對の然も無價値な「豊かな物質」をあげたかつたのである。「お前達は教會でくれるプレゼントの品が好

きで行くのだろう」と私は内心ではするどく子供達をにらみけて居たのであつた。然し事實はそうでなかつた。子供達は△先生の熱心な信仰に動かされたのであり、之に氣付いた私は自分の不純さに全く恥ぢ入つた。

この事があつてから私は胸の中に生れた疑問にひどく苦しめられるようになった。

自分は果して△先生だけの信仰心があるのだろうか？ 自分は子供達を教化するだけのねうちをもつてゐるだろうか？ 子供達はどれだけ自分を信じていてくれるのだろうか？ このような疑問は日に日に濃くなつて行く。全く子供の純心さに私が苦しめられているやうなものだつた。子供達は無邪氣に遊んで居る……。

私が「さあ靜かに目をとじて掌を合はせませう」と云ふと素直に目をつむり掌を合はせる……。おもしろい話をしてやると大きな口をあいて無心に笑い興ずる……。悲しい話をすると涙ぐむ……。全く子供の氣持は潔い、美しい。この無邪氣な子供達の氣持を私がかがして行くような氣がした事もある。こんな日日を續けているある日、又しても

或る子供が私に聞いた。「先生、極樂や地獄は本當にあるの？」隣りの子供がすかさず「先生、あれはたとえ話です」と云つた。然しこの時だけは私の心の底からの答が出来た。

「地獄の事はたとえ話だが、極樂は本當にあるのですよ。」こう答えて、私はうれしかつた。お釋迦様とイエス様とどちらが偉いのか聞かれた時も、教會へ行つて一番おもしろいものは、と聞かれた時も、私は本當に心の底からの答を子供たちにはいかなかつた。

それは排他的な行動を常に攻撃して、自己の立場を防備した私の不純さ、面倒な問題は要領良く處理して自己をみせかけようと云ふ虚榮心、それが私を眞實さの無い先生にしてしまつていたのである。

でも今度だけは眞實を語る先生と成り得たのである。凡入報土とか指方立相とか云ふ理くつを抜きにして、私は極樂の眞實(眞實在)を認めている。そして、それを信じている。子供達もおそらくは素直にそれを信じてくれた事であろう。

佛教は地獄を説く宗教ではない。

私は極樂こそ信ずれ、地獄は絶対に信じない。

い。

地獄は惡因惡果の譬喩である。然し極樂は善因善果のたとえ話にとゞまるものではない。それは阿彌陀佛がわれ／＼凡夫を救ふ爲に二百一十億もの多くの國々の中から選び出された唯一つの尊いみくになのである。その事を子供達に説明しようとしても、どうしても上手に話す事が出来ず。全く残念だつた。

子供會の最後の日が來た。「先生は明日から又東京へ行つて勉強いたします。皆さんは先生が居なくとも必ず毎日佛様を拜ませう。そして來年の子供會まで元氣で、立派な佛様の子供になつて下さい。」……シクリと云ふ泣聲がもれた。女の子供達が泣いている。私もなんだか胸が一ぱいだつた。そして子供達の顔がボォーとかすんで映つた。みんな極樂を信じてくれる子供達であつた。

われ等は佛の子供なり
うれしい時も悲しい時も
み佛のそでに、すがりなん。

私は今でも、あの泣きながら唱つてくれた「佛の子供」を忘れる事が出来ない。

寵恩の境逆

—ハワイ佛教から—

哲本文本宮

つた。
長い抑留生活から歸つて來たせいもあるだろうがハレイワ一圓の同胞は殆ど残りなく見舞に來てくれた。殊に戦前の教子達が示してくれた数々の純情には全く泣かれた。或教子の如き『先生お見舞の印です』と狀袋を置いて行つたが後で開けて見て驚いた。中には貳百弗の札束が入れてあつたのである。こんな風で私は眞に恵まれた生活を楽しんだのである。

恰度當日が天下御免のウソつき日だったので笑うに笑えぬ色々の滑稽を演じたが津浪だけはウソから出た生々しい現實なので其の慘憺たる被害の跡を眺めて私は唯茫然として自失したのである。

此の豫期せぬ天災に打ちのめされて途方に暮れてる最中豫て日本進駐軍に服務中の教子に依頼して問合せ中の長男修の消息が國の師匠から届いた。開封一番目に焼きつ

いたのが修戦死の悲報である。噫何たる哀

然し此の世の中は寸善尺魔一寸先は闇である。歸布して僅か四ヶ月目即ち一九四六年の四月一日突如として布哇を襲うた大津浪のため一瞬にして家なきルンペンに叩き落されてしまった。實に九天直下の暗轉で昨日の淵が今日は瀬となるを地で行つたのである。

當時妻が先年うけた津浪の経験で津浪襲來を寸前に覺り避難したので家族一同無事なるを得たのがせめてもの幸いであつた。

愁ぞ彼は既に一九四四年ヒリッピンに於て戦死して居たのである。然るに知らぬが佛私共夫婦は抑留所内で『修入隊す』の通知に接して以來日夜彼の無事を祈りつゞけて來たのである。噫それなのに何と云う悲惨な事ぞ、諺に云う『踏んだりけつたり』とは當時の私に最適な形容である。流石木強漢の私も此時ばかりは完全にノックアウトされてしまった。況や妻は全くの病人になつたのである。

滿四ヶ年の抑留生活からやつと解放されて歸布した同志の中には住むに家なく非常に困つた諸君も多かつたが私は元の古巣ハレイワ淨土院が戦時中軍部に接收され終戦度立派に修繕して返してくれたばかりの家に入る事が出來て眞に仕合せだつた。それに苦勞を覺悟で歸布したのであるが事實は案に相違して頗る恵まれた楽しいものである。

憶えば一九三九年彼が太平洋學院を卒業するや私は彼を僧侶にするため嫌がる彼を無理に勧めて日本にやつたのである。それと思うと一層不憫が加わるのである。

私はあれを思い此を想うて日夜悶々として絶望の深谷をさ迷いながら、『噫世には神も佛もないものかこの日暮て道遠い老僧に試練としては餘りに酷だ』とつい御佛までが怨めしく世の中が黒一色に塗りつぶされて萬事捨鉢氣分になつたがそれでも伴の死を悼む餘り怨み乍ら泣き乍らやるせない思いを佛前に額づいて涙と共に念佛させて頂く中これ迄の念佛が空念佛だつたと氣付かせて頂いた時廓然として靈感を覺えた。

『さうだ矢張り御佛の試練は有難い。私に眞の御念佛をお授け下さる方便として此の試練をお示し下されたのである。』

と初て感得した逆境の恩寵私は合掌せずにはいられなかつた。

お蔭で自暴自棄の心も自然に静まり遅々

たる足取ではあつたが津浪被害の復興にいとむ事が出来第一工事の寺と住宅、第二工事の學校、第三工事の石垣と次々に竣工する事が出来た。特に海側の石垣は赴任當初より是非築造したいと思ひ乍ら今日まで實現し得なかつた。それを此度の不幸が機會となり長さ二百廿二尺高さ九尺厚さ二尺の頗る頑丈なものが諸人の奉仕により五サnderで落成したなど眞に感激の至りである。

斯くして萬事以前に増して完備したのであるが之も偏に安逸に馴れて歸布當時の覺悟が麻痺しかけた私に逆境の恩寵を體得させて頂いた佛陀大悲の賜と只管廣大無邊の佛德を仰ぐのである。合掌

(筆者、在ホノル、淨土宗別院)

短 片 消 息

増上寺法主椎尾辨匡大僧正は、七十五歳の老軀をもつて、今秋九月、ハワイに御親教されます。海外在留の佛教徒、殊に淨土宗信徒の方々の心からの喜びが、今から想像されます。念佛の聲の内外にひろくたかまることは私どものまたふかき喜びです。

○

文學博士大野法道先生は、先頃、大本山増上寺執事長に御就任になりました。新しい時代に對する新しい教學の道は、椎尾法主とともに、二人の博士をもつ佛教界に唯一のこの大本山から拓かれてゆくことを期待します。

○

淨土宗の夏季特別講座が、七月十七日から八月八日まで連日、大正大學を會場として開かれ、本會關係では、佐藤賢順、佐藤良智、阿川貫達、藤田寛雅の各氏がそれぞれ出講されています。



妻のたしなみ

早見君子

家庭に於ける妻の美容心得といふやうな事柄について考慮してゐる方があつてせうか。若しあるとすればその方の家庭はいつも明るく楽しく健康であらうと思ひます。従つていまはしい倦怠期などある筈はないと思ひます。家庭の妻はどの程度の身だしなみが適當かについてお話ししようと存じます。

ある雑誌社の座談會で『夫の愛情を保ち倦怠期をふせぐには』といふやうな會がありました、男女數名出席の會合でしたが、或る夫人で『私は或る時は藝者の如く又カフェーの女給の如く、おめかけさんの如くモダンガールの如くさまざまに自分の姿や態度を變化させて夫を惹きつけてゐる』と云つた人がありました。事實その夫人は美人でもあり、お金もあり、云ふ通りの生活をしてゐるのでした。この時私は『心の置きかたは別として、姿形を變化させてまで夫の機嫌をとる事は、

夫妻が互ひに侮辱しあつてゐるのと同じで不純です、もしその家庭に娘や息子があつたら父母の下劣な生活をどう見るか教育上からも

問題です。妻には妻としての生活があり愛情の表現があるといふ事を認識し妻の在りかたを夫に認識させて相共に協力すべきでせう』といふ意味の意見をのべたところ男子からも女性からも意見百出でなか／＼面白かつた事を今思ひ出しました。民主主義の今日可笑しいやうな話ですが本當の事なのです。

今もなほこんな不合理な惱みを持たねばならぬ生活があるでせうか、若しあるとしても無いとしても、家庭に於ける妻と夫との在り方を研究することは無駄ではないと信じます。

家庭のおちつき

妻がお洒落をする事をあまり好まぬ夫もあります。然しどんな男子でも殊更に垢がついたりぼろを下げたりバサバサ髪を妻の姿を喜ぶ夫はまづありますまい。妻は何よりもまづ體にも着物にも垢をつけてゐない事が第一でこれは化粧の前の基礎とでも申しませうか、これを部分的に云へば、和服では肌着類、袖

口襟元足袋などに注意する事です。

洋服も亦然りで、ズボンの膝に大穴があつたり白い筈のものがあいまいな色だつたり、靴下に大穴があつたりしないやう早いうちの手入れで補ふ事が出来ます。それからまた眼先を常に新鮮にするために、少々でも部分的にでも物を取り替へる事は非常に効果的な感じをあたへます。又自然着物の持ちもよくなるわけです。

よごれは禁物

髪の毛は勿論、體に垢をつけて置く事は不潔観ばかりでなしに妙に夫を落ち着かせないものです、それも小さいところの垢ほど眼につくものです。爪の間の黒い垢、鼻の穴の毛ののびたのとよごれたの、耳のよどれ（これは髪がよごれて枕のきれのよごれからくる場合が多い）それから顔や手先の荒れや唇の荒れ（床についてからふと顔を顔にかぶせると唇が荒れる）なども夫の心を落ち付かせない上に妻の家庭苦に憐憫の情を起させたり（こ

れはとても良き夫、愛妻家などの場合）或は不精さとだらなしなさを思はせたり（この方は少々冷淡な夫の場合）いづれの場合でも一種の暗い影がさします。

では肌のなめらかさと清潔を保つにはどういふ手當をすればいいでせうか。まぶしいほどの美しさは却て家庭での夫を落ちつかせない。ではどう化粧したら、とつぎ／＼に問題はあると思ひます。

見苦しい事も家庭内だから、といふよそ行き第一主義の考へかたには不合理で家庭に不忠實です。人生の九割を家庭内で過ごす妻にとつては家庭生活こそ所詮は全生命であります。外出のためにみの美容でありません。ゆえ『たれに見せるとて紅かねつきやうぞ』といふ唄の文句の一片も心の奥に秘めて置いて大切な自己の生活に全きを得られますやうに心がけることこそ女性最大の幸福であります。

聖凡一如？

夏の盛りの頃、京都に遊んだときとある氷屋に入つた。注文しようとして壁にかけつらねた品種品目をかいた短冊が、風にひるがえつてゐるのを見渡すと、うじというのが目についた。とたんに、それが好きであるのに、どうしても口にする氣にならなかつた。うじと書いてなければいけないのだ。うじはあのほのかな香と緑の「宇治」氷であり、うじはうじ虫である。

これは戦前のこと、ある作家の話だが、その文字に對する鋭い感覺に共鳴する。しかしいまでは現代假名づかいによつてこうしたやかましい區別も多く一様化されている。しかし、一様化することの問題がある。うじがうじにまで向上しての一様化でなくて、世の姿の多くには、むしろうじがうじに順落してうごめいてゐる様なのがある。はしないか。一様化は低いところではなくより高いところでの一様化であつてほしい。

たゞ申す念佛

法然上人
法語私釋 (七)

—念佛申すにはまたく別の様なし—

藤井實應

念佛申すにはまたく別の様なし、たゞ申せば極樂へむまると知て、心をいたして申せばまいるなり。

(法然上人、常に仰せられける御詞。「念佛問答集」「勅集御傳」等にあり)

法然上人のみ教へは、南無阿彌陀佛と私のこの口をとほして申すことの中に、すべてはこもつてゐる。その念佛を申すには、全く別の様はない、たゞ申せば極樂に生ると知て南無阿彌陀佛と申すばかりである。

しかるに念佛を申すには、甚深の義があるとか或は佛の相好を心にかけて申さねばならぬとか、或は道心をおこし心を淨めて申さねばならぬとか、或は南無阿彌陀佛の宗義や道理をよく知つた上で稱へねばならぬなど、さまざまに念佛申す様を説くことは

「念佛申すにはまたく別の様なし」の仰せにはづれることになる。法然上人の常に仰せられたみ教は「たゞ申せば極

樂へむまると知て」申せばよいのである。

「たゞ申す」のたゞは、獨りである。法然上人のすゝめたまふ選擇本願の念佛は獨り立ちの念佛で、助はいらぬのである。智慧とか、道德とかの助はいらぬ、本願の念佛は獨立獨歩である。本願の念佛は無上大利の功德が具はつてゐる。われわれはたゞ念佛申すばかりで救はれる。無上大利の功德の本願の念佛をたゞ一すじに申す専修一行である。それがたゞである。

たゞひたすらに南無阿彌陀佛と申せば、極樂へむまると知つて(安心)たゞ申す(起行)ばかりである。安心も起行もその中に含まれ、具はつてゐる。

「心をいたして申せばまいるなり」

心をいたしてとは至心である。まごころである。うらおもてなき心、かざらぬ心、すなほな心である。

往生は世に易けれどみな人の

まことの心なくてこそせぬ

このまことの心で「たゞ申せば極樂へむまると知つて」南無阿彌陀佛申せば、三心おのづから具足して彌陀のひかりに攝めとられて必ずその極樂に生るとのみ教へである。

○

名號によつて救はれる宗教、誰でもが稱へ易い六字の名號を稱へることによつて萬人が救はれてゆく、男も女も、老いたるも幼きも、學問のあるものも無いものも、賢きものも愚かの者も、善人も悪人も一切が名號にすくはれてゆく。

おもうに、われわれは、みほとけといひ、阿彌陀佛といつてもその實體は、なかなか分らぬ。分らぬけれどもその名號を稱ふることによつて、みほとけの實體——即ち大智慧と大慈悲にちかにふれて救はれてゆく。最低最悪の凡夫が最高最善の極樂に生れるとの宗教、悪人や愚人がそのまゝで救はれてゆくとのみ教、特別のむづかしい修行をしなければならぬといふのではない。歩きながらでも、働きながらでも、ねながらでも、日常の姿そのまゝで、たゞ名

號を申すばかりで救はれてゆくといふ。かやうな宗教が淨土教の外に他にまたとあらうか。

この凡夫が報土に往生するみ教を開顯せられたのが法然上人である。選擇本願の念佛即ち南無阿彌陀佛の名號にて一切が救はれる。その念佛は阿彌陀佛の選擇したまふた本願であるから、その阿彌陀佛の本願力によつて南無阿彌陀佛申す者は悉くそのお救ひに預るのである。救ひとはこの愚惡迷妄苦惱の一切から解脱して佛の教子となり、やがて佛となることに外ならぬ。

法然上人は名號はこれ萬德の歸する所であつて、彌陀一佛にあらゆる四智三身十力四無畏等の一切の佛の功德が攝めとられてゐるから名號の功德は最もすぐれてゐると選擇集にも述べられてゐる。所謂無上大利の功德が具つてゐるのが南無阿彌陀佛の名號である。

この本願力に救はれ導かれ育てられゆくののであつて、己が力ではない、阿彌陀ほとけの御力によりて助けたまふ道がこの本願の念佛である。

それゆへ、たゞ南無阿彌陀佛と申すより外に本願もなく本願はすなはち南無阿彌陀佛である。たゞ申す念佛によつて極樂にまいるのである。實にこの口をとほして稱ふる南無阿彌陀佛はわが爲には直接に私を導き育て救ひたまふ生き佛に在し、本尊に在す。たゞ南無阿彌陀佛と「心をいたして申せば参るなり」との仰せが有難く味はれる。

われわれが如何ほど念佛の功德を聞き、微細にわたつてその義理が解つても、それだけでは、それは要するに藥の功能書を知つたにすぎない。藥そのものを實際に飲まなければ病は癒らぬのである。申せば極樂へむまると知つて南無阿彌陀佛とこの肉をとほしてたゞ稱ふるばかり、そこに救ひの實際があらはれる。すつかり光の中に攝めとられるのである。即ち心を致して申せば參るなり」である。

徳本上人のお歌に

たゞ申せたゞたゞ申せたゞ申せ

申す一つで往生はする

古歌に

一文字も思ひ分ざる身となりて

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

○

かくたゞ申す念佛であるが、忘念におそはれ、口さきばかりの念佛でよいか知らと、眞劍に道を求むる人には問題が起きてくるのではなからうか。それについて私は勅修御傳にある法然上人と明遍僧都との對面のお話を思ひ出す。

法然上人が天王寺におはした時に、高野に遁れて、ひたすらに道を求めてをられた明遍僧都が、善光寺へ參られる途に、法然上人をおたづねになつたことがある。

上人が客殿に出られて

「どうぞこちらへ」

と申された、僧都はそこへ座るか座らぬに「この度び如何して生死を離れることができましようか」とおたづねになつた。

上人「南無阿彌陀佛と唱へて、極樂に生れることが最上の道と考えます。」

僧都「私も左様に氣づいていますが、念佛のとき、心が散亂し、妄念が起つてくるのを、どうしたらよろしいでしようか」

上人「此の世界に生をうけた人間として、心がどうして散らないでをられましよう。煩惱をもつた凡夫として、どうして妄念を止めることができましよう、それは源空も力及ばぬことです。しかしながら、心は散り亂れ、妄念は競いおこるとも口に名號を稱えたならば、阿彌陀佛の願力によつて、決定して往生するものと信じます。」

僧都「これを承る爲に參つたのであります。」
と僧都はすぐに座を立たれて退出されたのであつた。

これは有名な話、それだけに、われわれはまたいろいろと教へられ學ばしめられるのである。

初對面の人が、一言も世間の禮儀なくして、終始法門に就て語られ、余言なかりし眞劍な求道！

そこにゐた上人の門弟らも感激したといはれるが、七百余年を隔てた今日、われわれは眼の前に教をうくるが如く、感動深きものあるを覺えるのである。

明遍僧都の眞剣な求道的態度に學ぶと共に、法然上人のその尊き態度に深く動かされる。

「それは源空も力及ばぬことです」と、同じ凡夫の立場、一列同座にあつて、明遍僧都の心もちをそのまゝに、自らの心の中に味ひ、同じく彌陀の光明に攝められる同信同行の友として對せられ、決して教をうけるものと教ゆるものとの差別的態度はない、同時に自らの信する所をありのまゝに述べられた。それが又そのまゝ僧都を導くものとなつたのである。眞に道の傳はりゆくさまはかくの如きものであらうか。

殊に上人の「心が亂れ、妄念がおこつても、口に名號を稱へたならば阿彌陀佛の願力によつて決定して往生する」との體驗をとほしてのお言葉を深く味はねばならぬ。

○

妄念が起ると妄念にとらはれ、心が散れば散るといふことにとらはれ、惡を行ふては惡にとらはれ、善を行ふては善にとらはれて容易に進むことが出来ない。しかし、妄念が起れば起れとうちすてゝとりあはず、心が散れば散れとそれにとりあはないで、善惡にかゝはらずますます勵んでお念佛を申すことである、そうすれば直ぐにどうなるとはいへぬけれども、たゞ申す相續の中に、自然に鹽化せられ育てられて、やがて妄念もやみ、散心も止まり、お慈悲にふれて有難い心もおのづから心に湧き出てくるのである。

善惡正邪、毀譽褒貶、成敗得失、矛盾苦惱等のその只中に名號をとなへることである。名號を唱へることによつてその矛盾苦惱にとらはれない、善惡を越えた生活に導かれてゆく、決定して如來に育てられるのである。「南無阿彌陀佛と申すが手にて待るなり」(三部假名抄)で、たゞ念佛することが要中の中である。

○

また一言芳談といふ書物に此れに連關した消息を傳へてゐる。

或人が敬日房に問ふた。

「稱名は往生の要と知つて稱へるのでありますが、心には野山のことばかり思はれて、口ばかりの念佛では如何でありましょうか。」

これに答へて

「あなたはこゝへ來ようといふ心で出發せられたであろうが、歩いている間は、あゆむ足ごとに、これへこれへと思ひつゞけてきたのではないでしょう。あらぬことなど思はれながらも、歩みつゞけられてこゝへ來られたのです。それと同じように、初めは極樂へ生れたいと願ひ、助けたまへと心に思ふて、彌陀の名號をとなへるのであるが、唱へてゐる間にはいろ／＼あらぬことなど思はれても、稱名やまずして相續せられたならば、必ず決定して極樂に生れることができるのである」と。

又、心前行後、行前心後といふ言葉がある。佛の本願を聞き、極樂に生れたいとの心を起し、名號を稱へる。これが心前（極樂に生れたいとの心先づ起きる）行後（念佛の口稱が出てくる）といふのである。

念佛を相續してゐると、やがてそれが習慣的になつて、思はず口に念佛が出る。その聲がわが耳に入つて我心をたゞき起して、願生の心もはつきりしてくる。これが行前（念佛が先づ唱へられ）心後（願生の心がそこにあらはれる）といふのである。

これは一應區分して説いたまで、實には心と行とは、あさなへる繩の如く、或は物の裏表の如く、離れることのできぬ關係にあるのであつて、心前行後も、行前心後も要するに南無阿彌陀佛申す中に具はつてゐるのである。それゆへ、「たゞ申せば極樂へむまると知つて、心をいたして申せばまいるなり」と仰せられてゐるのである。

極樂につとめて早く出でたゞば

身の終りには参りつきなん（法然上人）

只申す念佛ではあるが、佛の本願力によりて不斷に導かれ育てられてゆく。身の終りには参りつくことの出来るまでに如來の光明攝取を頂くのである。その育てられゆく道程は無限といつてよいであらう。われわれは只南無阿彌陀佛と只申すばかりである。

朝眼がさめたら先づ南無阿彌陀佛、

食事の前後に南無阿彌陀佛、

箒を手にしても南無阿彌陀佛、

人と應對する時も南無阿彌陀佛、

お金を扱ふにも南無阿彌陀佛、

手紙を書く時も南無阿彌陀佛、

一々當面することみな南無阿彌陀佛、

悲しいときも南無阿彌陀佛、うれしい時も南無阿彌陀佛、

成功した時も南無阿彌陀佛、失敗した時も南無阿彌陀佛、

有難くない時も南無阿彌陀佛、有難い時も南無阿彌陀佛、

一日のつとめを果して眼りに就く時も南無阿彌陀佛。

たゞ南無阿彌陀佛と申す生活。無限に導かれ育てられて、

然して南無阿彌陀佛と息絶ゆる。その時すべて如來に攝取

されうるのである。いろ／＼と解釋しても、申さなければ

法然上人の御意と千萬里の隔りを生ずる。念佛申すにはま

たく別の様なし。たゞ申せば極樂へむまると知て心をいた

して申せばまいるなり。南無阿彌陀佛。

訂正

七月號「阿彌陀經を讀む」廿二頁上段中「大無量壽經」とあるのは「無量壽經」の誤植です。なほ阿彌陀經が小經とよばれるのに對して無量壽經は大經ともよばれています。（藤田）

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですからその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◇連日の暑さの中にも、各地の皆さま、お元氣のことゝ存じます。

汗して働く暑熱の日々の中にこそみのりゆたかな秋が約束されてゆきます。朝鮮問題が、私たちの生活にあたえる影響は、決して少なくないと思いますが、しかし一面あの苦難の戦争の経験をとほつてきた私たちは、いまこの外の問題の影響のみに眼をうばはれて、自らの内なる問題を忘れてしまつてはならぬと思ひます。

◇金閣寺を焼いたものは何だつたでせう。たゞ戦後派の言葉を以て解決できないものがあります。人々は、戦争の空白ということを、都合のよい言葉として使つてゐるようです。若い人々も、老人も、あの數年の空白に罪をきせて、甘えてゐるのではないでせうか。一體、この人生に空白なるものがあるでせうか。空白にせよ、停滯にせよ、退歩にせよ、やはりそこに

は人生を生きる態度があつたのです。若しそれを、空白と感ずるなら、私たちはそれを埋めるための努力を傾注すべきでせう。

空白をいう若い人たちに、この努力があつたでせうか。大人の私たちは、空白といふ影にかくれてたゞねそべつてはいないでせうか。◇内なる私たちの姿を省みて、まだまだ努力の足りないことを痛感します。今月號は、そうした意味で、反省の隨感をいたしました。小篇ながら、いろいろの點で、みなさまの共感が願えることゝ思ひます。

◇朝鮮問題が起つてから、今まで世間の學者諸先生が唱えられていた、平和論議がバツタリかげをひそめた感があります。しかし、今こそ私たちは、より一層つよく、平和への志向をかためるべきでせう。宗教が平和を本領とすることは、元來、人間の生活が平和をこそ常態とするものだからです。しかし過去の歴史は、不幸にも、そ

の正常の軌道から脱線してしました。生活が常態を外れ、宗教もまたその本領に逆行し無爲に過ぎたことを反省したい。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申し上げます。

「浄土」 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年七月二十五日印刷
昭和廿六年八月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

東京都千代田區神田區保町

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人續仰會

振替東京八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

浄土トラクト第三集豫告

誰にも親しめて分り易いお盆の話
興味ふかい民俗を描いたお盆の話
自然に信仰心が養われるお盆の話
正しい信仰が求められている。文書傳道こそ、それに
こたえる第一歩。お盆の施本に最適の書

佐藤密雄著

お盆とおせがき

別表紙装釘

一部四圓
送料六圓

◆送料一〇部以上十二圓、一〇部を増す毎に六圓増

但し五十部以上三五圓、百部以上當方負擔

◆二百部以上は希望申込により表紙に寺名刷込をいた
します。

申込所 東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二二八七番

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味の
ある装釘、そして誰もが気軽に手にできる廉價
—浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えら
れています。

お十夜の話 藤田寛雅著 四圓送六圓

お彼岸の話 竹中信常著 四圓送六圓

お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の
歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教へ
の常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等
に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會